

豚糞桿虫に対するヒネトール（ゲンチアナバイオレット  
製剤）の効果（補遺）

長野 鍊太郎\*・伊藤 祐之\*

NAGANO, R. and ITO, S. The Efficacy of Hinctol (Gentiana-violett)  
for Removing *Strongyloides Ransomi* of Swine (Supplement)

豚糞桿虫は殆んどすべての仔豚に寄生し、多数寄生する時は發育障害を起し、所謂ひね豚の直接、間接的な原因となるとみられており、従来その駆虫は困難視されている。我々は先年三興化学工業KKのヒネトールの提供を受けたので駆虫試験を行つたが（本誌19号

\*九州農業試験場

掲載）その際投薬による若干の副作用を認めたので今回は投薬量を減じて試験した。

方法 1. 供試豚雌乳仔豚7頭（生後日令74日～76日、体重7.7kg～14kg）及び哺乳仔豚7頭（生後日令35日～44日、体重4.9kg～7kg）2. 投薬法 仔豚は保定し、口腔深く本剤を挿入、投薬前の絶食は行わ

ず、また投薬後の下剤も使用しなかつた。3. 投薬量 離乳仔豚、哺乳仔豚何れも1日2回1球宛2日間連用と1日1回1球宛2日間の区に分けて投与した。(1球中には *Gentiana-violett* 0.2 gm を含有す)

成績 1. 糞桿虫卵の排泄状況を E.P.G (糞便1 gm 中の虫卵数) で示すと表の通りで離乳仔豚の場合1球2日間投与、2球2日間投与した何れの場合も投与後3日目の陰転率は50%であつたが、陰転しなかつた仔豚の E.P.G も著しく減数した。また哺乳仔豚の場合1球与えた場合100%の陰転率を示したのに対し、2球与えた場合33%で逆の結果を示した。しかしこのことは恐らく投薬前における E.P.G の多寡によるものではないかと考える。即ち実際の駆虫に際しては、春生産した仔豚では他の時期に生産されたものにくらべ、本虫による寄生濃度が高いのであるが、本試験の成績からすれば濃厚寄生豚には再度の投薬が望まれる。

2. 宿主に寄生していた鞭虫、蛔虫、大腸バランチヂム等についても同時に観察したが、薬剤投与によ

る卵、原虫の減少は認められなかつた。

3. 副作用としての下痢は離乳仔豚の場合2球投与したものに1~2日間認められたが、前年度の3球与えた場合に較べその程度は減弱された。また哺乳仔豚

の場合、1球投与では概ね1日間、2球与えた場合は2~4日間、全部に紫色に着色した恰も水瀉状の下痢便を排泄した。体温、脉搏、呼吸等には異状は認められなかつた。

4. 剖検 投薬後2頭を剖検したが、異状は認められなかつた。

考察 本剤が豚糞桿虫に対し効果のあることは前年度、既に報告したが、今回は副作用を減弱させるため投薬量を減量した。また本虫は生後日令が進むにつれて減滅してゆく特徴がある点を考慮に入れて、本剤

桿虫卵の排泄状況 (E.P.G)

豚	豚番号	投薬前		投薬後				薬量
		2日	1日	1日	2日	3日	4日	
離乳仔豚	1	7,800	8,100	0	0	600	0	1日1球 2日間
	2	4,500	3,900	0	0	0	0	
	3	3,000	30,900	0	0	0	0	
	4	4,200	3,600	0	0	600	0	
哺乳仔豚	5	26,700	28,800	—	剖検	—	—	1日2球 2日間
	6	57,000	58,800	300	0	300	0	
	7	9,600	9,000	—	0	0	0	
哺乳仔豚	1	15,300	14,100	—	0	0	0	1日1球 2日間
	2	69,600	80,100	—	0	0	0	
	3	84,900	75,900	—	0	0	0	
哺乳仔豚	4	226,500	235,800	—	—	—	900	1日2球 2日間
	5	270,900	263,100	—	—	0	0	
	6	412,500	419,100	—	—	剖検	—	
	7	476,400	491,400	—	—	—	3,900	

備考. — 下痢便のため鏡検中止。

の投薬適量を考えてみると、離乳後の仔豚の場合、1日2球を2日間、また哺乳仔豚では1日1球2日間投与が適量ではないかと考える。